

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 6 月 11 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
京都大学本部
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
心の先端研究ユニット、若手交流会
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 11 日 ~ 平成 26 年 月 日 (日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学こころの先端研究ユニット
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>このたび、こころの先端研究ユニット 若手交流会に参加し、ポスター発表を行った。交流会の前には、元陸上メダリストの為末大氏と認知神経科学者の下條信輔先生の対談が行われた。こちらは正直なところついでのもりであったが、こちらのほうが有意義なほど面白いものであった。恥ずかしながら、対談前はアスリートの視点から語られる「こころのありよう」は、トップアスリートだけに当てはまるような極端なものであるか精神論のようなものなのでは、と考えていた節があった。しかし、実際は驚くほど聴く側にすっとはいってきて、納得することしきりであった。自分の限界は物理的というより認知的に作り出されるものである、ということや集団(観客)とパフォーマンスの関係、身体イメージ、あるものへの意識の抑制、などすべての話題が為末氏の実感に根付いたものでありながら、下條先生の言葉の助けもかりて全くそのまま心理学の議論となった。ぜひまた聞きたいと強く思った。</p> <p>交流会の方は、私の発表は「フサオマキザルは他種のおとなと子どもの顔弁別ができる？」というタイトルであった。普段交流する機会のない京都の研究者と話す機会がもてたのはよかった。ただ、2時間半の時間がありながら、あまりたくさんポスターを回ることができなかったのは少し残念であった。学部時代の研究室を訪れ、今も代わりに続けて頂いている卒業研究の方向性を少し相談することができたのも、今回の京都出張の収穫であった。</p>
6. その他 (特記事項など)
本研究会への参加は PWS の支援を受けて行いました。ここにお礼申し上げます。